

Title	メルロー=ポンティにおける物の超越性
Sub Title	La transcendence de la chose chez Merleau-Ponty
Author	河野, 哲也(Kono, Tetsuya)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1989
Jtitle	哲學 No.89 (1989. 12) ,p.25- 46
JaLC DOI	
Abstract	Pourquoi la chose paraît-elle indépendante de notre conscience et de notre expérience? Pour Merleau-Ponty qui souligne l'inseparabilité du sujet et l'objet, le problème de la transcendance est si important qu'il le prend plusieurs fois. Cet article a pour but de poser une solution de ce problème à travers l'interprétation de sa pensée. Dans la première période, notamment dans <i>Phénoménologie de la perception</i> , en affirmant que la chose n'est transcendant qu'en étant inépuisable, c'est à dire en n'étant pas tout actuelle sous le regard, il prend la transcendance comme ce qui s'oppose à notre pouvoir de percevoir. Cependant à son dernier travail, <i>Le visible et l'invisible</i> , il en est arrivé à l'identifier à la Gestalt, à la pregnance et au Wesen verbal. Ces mots d'origine allemande signifient la stabilité dans le monde variant, en d'autres termes l'identité dans la différence. Ainsi, dans la dernière période, Merleau-Ponty considère la transcendance comme invariant ou essence qui rend possible notre première rencontre de l'Etre. Ce changement radicale de sa conception est un reflet du passage de l'ensemble de sa philosophie, passage de la phénoménologie de la perception à l'ontologie de la perception.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000089-0025">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000089-0025</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## メルロー＝ポンティにおける 物の超越性

河 野 哲 也\*

### La transcendence de la chose chez Merleau-Ponty

*Tetsuya Kono*

Pourquoi la chose paraît-elle indépendante de notre conscience et de notre expérience? Pour Merleau-Ponty qui souligne l'inséparabilité du sujet et l'objet, le problème de la transcendance est si important qu'il le prend plusieurs fois. Cet article a pour but de poser une solution de ce problème à travers l'interprétation de sa pensée.

Dans la première période, notamment dans *Phénoménologie de la perception*, en affirmant que la chose n'est transcendance qu'étant inépuisable, c'est à dire en n'étant pas tout actuelle sous le regard, il prend la transcendance comme ce qui s'oppose à notre pouvoir de percevoir. Cependant à son dernier travail, *Le visible et l'invisible*, il en est arrivé à l'identifier à la Gestalt, à la prégnance et au Wesen verbal. Ces mots d'origine allemande signifient la stabilité dans le monde variant, en d'autres termes l'identité dans la différence. Ainsi, dans la dernière période, Merleau-Ponty considère la transcendance comme in-variant ou essence qui rend possible notre première rencontre de l'Etre.

Ce changement radicale de sa conception est un reflet du passage de l'ensemble de sa philosophie, passage de la phénoménologie de la perception à l'ontologie de la perception.

\* 慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程（哲学）

## 1. 序

「超越性 (transcendance)」は、極めて古典的な概念であると同時に、また極めて多義的な概念である。しかし、問題を認識論的な文脈に限るならば、それは意識や経験から独立であると言った意味であり、対象が認識によって定立されたのではなく、主観性に対し自立的なものとして対立することをいう。実際、普段の生活においてわれわれは、物や世界は端的にそこにあり、われわれの意識にはお構いなしに客体的、即ち的に存在すると感じている。言い換えれば、諸物は自分の意識や経験とは独立に、すなわち超越的に存在しているという強い実感をわれわれは持っているのである。しかし、現に目の前にある物や世界は、われわれの意識のうちで経験した対象であるかぎり、それらはわれわれの経験や意識の外にあるどころか、まさにその枠内で捉えられたものであり、むしろ内在的であると言わねばならないだろう。にもかかわらず、われわれは、現に見ている物にさえ、それが自分の主観性から独立していると感じる所以である。では一体、こうした物の超越性の実感はどこからくるのであろうか。われわれは、いかにして、自らの経験の内に、その当の経験を越えて出たもの、そこから独立したものを認めるのであろうか。

モーリス・メルロ＝ポンティは、この超越性の問題に強い関心を持っていた。特に彼はそれを「物 (chose)」のあり方と関連させつつ、なぜ物が経験や意義に内在的であると同時に、それを超越したものとして捉えられるのか、そして、この超越性を実感する根拠はどこにあるのかを問題にしていた。本論文は、メルロ＝ポンティが物のあり方とその超越性をどのように把握していたかを明らかにし、そこにわれわれ自身の考察を加え、上記の問題に一つの回答を与えることを目的とする。しかし、メルロ＝ポンティの思想には、この物の超越性をいかに捉えるかにおいて、『知覚の現

象学』に代表される初期の立場と、晩年の『見えるものと見えないもの』に見出せる立場には、彼独自の思想の進展と変化が見出だせる。よって、本論では、2節で『行動の構造』および『知覚の現象学』について、3節で『見えるものと見えないもの』について論じ、物とその超越性に関する彼の思想の変化を浮き彫りにし、そこに解釈を加えて行くことにする。

## 2. 初期思想における物の超越性

この節では、メルロ＝ポンティの初期思想における物の概念を追いかながら、そこにどのように超越性の問題が絡んでくるのかを明らかにしたい。

メルロ＝ポンティは、彼の最初の著作である『行動の構造』<sup>(1)</sup>においても、人間における物のあり方について触れている。そこで彼は、ケーラーのチンパンジーの行動に関する実験を参照しながら、動物にとっての対象と人間にとての物=対象は異なった構造を有していると主張する。

メルロ＝ポンティが参照するケーラーの実験によれば、チンパンジーは、箱を目標物に到達するための踏み台として使用することを学習することができるが、その箱に別の猿が座っていたりするならば、もはやそれを道具として認めることができなくなることが示されている。このことから、腰掛けられた箱と道具としての箱は、彼にとっては全くの別の二つの対象であり、われわれのように同一物の二つの局面、同一の事物の異なるパースペクティブとしては認めることができないことが理解されるのである。つまり、チンパンジーにとっての対象は、「場の実際的構成に依存する《ベクトル》をまとい、《機能的値》を付与されて現れる」<sup>(3)</sup>のであり、その都度の力学的場から独立しておらず、様々に局面が変わっても同一性を保ち続ける「物」ではないのである。

しかし、われわれにとっての対象=物はそういうものではない。確かに、人間にとての物も、その都度の特定のパースペクティブにおいてしか現れないものであるが、それにもかかわらず、様々な局面を通じても同一性を保ち、その場限りの現われや力学的場に埋没し切ったり、閉じ込められたりすることのない独立性を有しているのである。よって、われわれにとっての物は、場に依存した現れの次元より、より高次の構造に属すると考えねばならず、「チンパンジーが処理する《交換可能な》形態の上に、その構造が、さらにより自由に処理可能で、ある感覚からほかの感覚へと移行できる独自の構造の次元を認めなければならない」<sup>(4)</sup>のである。メルロ＝ポンティは、この次元での人間の行動構造を「象徴的行動」と呼んでおり、まさにこの高次の次元でのみ「物としての構造」が成立するのだと主張する。

このようにメルロ＝ポンティは、『行動の構造』において、われわれが対象を物として扱うことができるのは、象徴的行動という動物には見られない高次の行動の構造が人間に備わっているからであることを明らかにした。だが、彼はこの著作においては、物を超越性に結びつけて語ってはおらず、それが「物の超越性」という問題として論じられるようになるのは、次の著作『知覚の現象学』<sup>(5)</sup>からである。特にその問題が中心的に論じられるのは、「物と自然的世界」という章においてであるが、それより前の部分において、彼は、「したがって、客觀化の能力、《象徴機能》、《表象機能》、《投影機能》が、それ〔抽象的運動、カテゴリー的態度〕に宿っているのである。この能力は、他方《諸物》の構成においても働いており、…一言で言えば、諸印象の背後にその根柢となる不変項を配置し、経験の素材を形態化してくる能力なのである」と述べている。この文章から分かるように、『知覚の現象学』における彼の<物>に関する考え方は、『行動の構造』のそれを踏襲しており、根本的には変化がないと見て良いだろう。

では、『知覚の現象学』では、メルロ＝ポンティは「物の超越性」をどのように捉えていたろうか。前述の「物と自然的世界」<sup>(7)</sup>という章を中心に考察してみることにする。メルロ＝ポンティは、この章の始めで、上記の『行動の構造』と同じ問題意識をもって疑問を提出している。「すなわち、知覚対象は、知覚する主体のパースペクティブに応じて、絶えずその形や大きさ、色を射影させて現れるものであるにもかかわらず、どうしてわれわれは、それらが同一の対象の射影であると信じ、それが本来一定の形や色を客観的に備えていると信じているのだろうか」という問題である。

もちろん、この問い合わせに、即座に一つの回答を与えることは可能であるようと思われる。つまり、対象とわれわれの視点との間に恒常的な諸関係が成り立っており、物の真の形と大きさとは、現れ、距離、方向がそれに従って変化する恒常的法則にほかならないのだと答えることである。しかし、メルロ＝ポンティは、物に備わっている形や大きさを関係概念と捉えるこうした考えを退ける。こうした考えは、暗に、物の形と大きさを可測的な変数や量として扱いうるものと捉えているのであり、科学の数量的な決定論に毒された主知主義であると彼は批判する。実際、このような立場では、コインは様々な角度から見ることができ、楕円でも長方形でもありますのに、なぜそれが「傾いた円形」としてしか見られないのかが説明できなくなるのである。

自分の目の前にあるテーブルを眺めることは、その固有の大きさと形を知覚することであり、諸現象の展開の法則ないし規則、不变の関係を知覚することではない。ある絵画を鑑賞するのに最適の距離と位置があるように、ある物を知覚することとは、それがその物の固有の形と大きさであると感じられるような、ある特定の形と大きさのもとでそれを知覚することなのである。「すなわち、一定の大きさと形を備えたテーブルを知覚するから、私は距離と方向のすべての変化に対し、大きさと形の相関的変化を推定するのであって、その逆ではない。諸関係の恒常性は、まさに、物の

明証性に基づいているのであり、物が恒常的な関係に還元されるどころでない。」つまり、物には「まさしくそのもの」と言える特権的な現れが存在し、この現われを軸として、ほかのすべての現れはそこに結集され、それと等価なものと見なされるのである。つまり、この特権的な現れこそが知覚過程の統一を保証しているのである。

以上の形と大きさの恒常性に関する彼の主張は、物の色彩や触覚的性質の恒常性についても適用される。メルロ＝ポンティは、色彩について比較的長くページを割いているが、そこでは、知覚される物には、やはり固有の色彩が備わっているのであり、さらに、色彩の恒常性も物の恒常性の契機に帰されるべきで、色は物の色としてのみ恒常的であると結論づけられる。「つまり、私が恒常的な色を見出だすのは、私の知覚が世界と諸物の上に開かれているかぎりにおいてなのである。」<sup>(9)</sup> 物の触覚的諸性質に関しても同様であり、それらもやはり、物の属性として恒常的なのである。

こうして、それぞれの感覚の恒常性は、むしろ物の恒常性の一つの契機として理解される。諸感覚は、ある物の属性となって、はじめて恒常的となるように組織されるのである。実際に、唯一の感覚にしか現れない所とは幻影に過ぎず、実在性を持ちえない。かえって、一つの感覚への物の現われは、ほかの諸感覚への物の現われを同時に要請するものである。「物は、それがもし同じく、この触覚的性質、この音響、この匂いを持っていなければこの色を持たないであろう。物は私の分割されざる実存が、自分の前に投影した絶対的充全性なのである。…例えば、グラスのもろさ、硬さ、透明さ、澄んだ音は唯一の存在の仕方を現しているのである。」<sup>(10)</sup> この物の統一性とは、存在論で言う基体や論理的主語となる空虚なXではなく、物の持つ独特の調子であり、諸性質がその二次的な表現であるようなある存在の仕方であり、いわばスタイルの統一性なのである。

このように、物が様々に射影するにもかかわらず、独自の性質と同一性を保っているのは、この相互感覚的なスタイルの統一性に基づいているか

らであるのだが、さらに、メルロ＝ポンティは、この物の統一性は、知覚主体である身体と切り離して考えることはできないと主張する。上記の引用でも見られるように、物とは、「私の分割されざる実存が、自分の前に投影した絶対的完全性」<sup>(11)</sup>なのであり、「知覚経験を通じて物が同一のままにとどまるということは、探索運動の過程でも自己の身体が同一にとどまるということの裏面でしかなく、両者は同じ種類のことなのである」<sup>(12)</sup>つまり、物は私の身体の相関物なのであり、諸物の間の関係や物の諸局面は、私の身体によって媒介され、私の身体の手掛かりのなかで構成されるのである。物は知覚する主体から分離することはできないし、実際には、即目的に存在することはない。「なぜなら、物の分節化はわれわれの実存の分節化そのものであり、また、物は、人間性が付与されるような視覚の末端に、あるいは感覚的探索の終わりに据えられるものだからである。このかぎりで、すべての知覚は交流 (communication) であり、合体 (communion) である。それは、外部からの指向のわれわれによる引き受けないし完成であり、逆に言えば、われわれの知覚能力の外部的実現であって、われわれの身体と諸物とが対になることなのである。」<sup>(13)</sup>なるほど、物は身体の相関物であり、身体が自ら統一的身体として組織化されているからこそ、物の統一性が保証されているに違いないだろう。身体の働きと無関係な即的な物、端的に客体として存在する物などは、本来は存在しないだろう。しかし、実際には、物は主観の支配を拒否するように思われ、主観性とは無関係な即的な客体として、われわれに現れるのである。ここにいたって、われわれが「序」で提起した問題、すなわち物の超越性の問題を、メルロ＝ポンティは自らに問う。「物がそれを知覚する当の人にも、物自体として現れること、また物が真のくわれわれに一とつての一即自>の問題を提起することも事実である。」<sup>(14)</sup>物を身体的生の相関者として捉えることは、物のすべての意味を捉えたことにはならないのである。

## メルロ＝ポンティにおける物の超越性

物を外部からの誘いの引き受け、ないし完成と捉えようと、知覚能力の外部的実現と捉えようと、それを知覚能力の末端に捉えることは、物が単に与えられたものではなく、われわれによって内面的に取り戻され、再構成されたものであることを意味する。そうなると、物はわれわれに内在的であることになるだろう。しかし、繰り返し述べたように、物は普段われわれの存在に無関心であるし、われわれの友人がしばしば自分の知らない顔を持っているように、物もまたわれわれの期待を裏切り、新たな姿を見せる。それはわれわれ主体を超越しており、いわば絶対的他者なのである。メルロ＝ポンティはこう述べる。「現実的なものは無限の探求に応じるし、それは汲み尽くしがたい。それゆえ、道具のような人工物が、世界の上に置かれているように思われるのに対し、諸物は非人為的自然という基礎の中に根づいているのである。物は、われわれの実存にとって、引力の極であるよりもはるかに斥力の極であるのだ。<sup>(15)</sup>」この「汲み尽くしがたさ」、そこから普段に未知の局面がわきでてくる「斥力」こそが、物の超越性の正体なのである。

もしも、われわれ主体が、知覚の材料を自ら能動的に思惟し、それを支配し、物のすべての局面を内部から構成し総合するのであるならば、物は全く主観に内在的となり、その不透明さと超越性を失ってしまうはずである。しかし、そうはならないのは、知覚する身体が、次々に繰り出されてくる物の局面に対し開かれているからであり、身体が物を統合すると言っても、その統合が、物の局面の無限の連鎖を完全に掌握し切ることなく、必然的に未完結だからである。「知覚主体は、…彼があらかじめその鍵を持っているのではないが、それが投げかけてくるものを彼自身のうちに取り込む、そうした物のほうに自分を向け、自分自身のもっとも深いところから準備した絶対的他者にひらくていなければならぬ。<sup>(16)</sup>」つまり、ランガーが指摘したとおり、「物の客体性は、その未完結であるという性質 (its open-ended nature) から不即不離であることをメルロ＝ポンティ

は示した<sup>(17)</sup>のである。彼が身体による物の総合を、諸性質の列挙による知的な総合ではなく、「スタイルの総合」であることを強調したことは、この物の未完結性の主張と符合するのである。

以上が、『知覚の現象学』における物とその超越性に関する彼の見解であるが、ここにわれわれ自身の考察を加えてみよう。

超越性とは、主観性（意識や経験）の外にあることであり、客観性の領域のことであり、即自的存在的領域のことである。超越性の対概念とは内在性であり、こちらは主観性の領域であり、意識や経験の領域をさす。つまり、内在性と超越性の対立は、主一客の対立に等しいわけである。メルロ＝ポンティによれば、物は、身体の分節化に対応し、身体の能力の外部的実現であるというかぎりで内在的であり、しかし同時に、それは「汲み尽くしがたく」、「斥力」を持つということにおいて超越的である。したがって、物は内在的であると同時に超越的なのである。<sup>(18)</sup>

このことから分かるのは、われわれの経験における内在と超越の区別は、普通考えられているように、空間的あるいは領域的に線を引くことのできる区別ではないと言うことである。もし、そうであるなら一つの物が内在的であると同時に超越的であることはできないはずである。むしろ、この区別において問題になっているのは、その経験なり現象なりの起源なのである。たとえば、われわれが頭のなかでイメージした家は内在的であり；反対に、知覚される実物の家は超越的であると言えるだろう。両者の違いは、後者が射影し、不透明で、汲み尽くしがたいのに対し、前者が知りつくされており、透明で、完全にわれわれの手の内にあるということにある。イメージがそのようなものであるのは、われわれがその一部始終を形成し、その内容を自由に変形することができ、われわれが思い描くことを止めれば消滅してしまうものだからであり、すなわち、われわれの能動性に基盤をおいているからである。逆に言えば、物が超越的であるのは、主体の支配を拒むからなのであり、物の中にはわれわれの能動性を起源と

## メルロ＝ポンティにおける物の超越性

しないものが存在し、メルロ＝ポンティが上の引用で指摘したとおり、諸々の物は「非人為的」自然という基礎に根ざしているからである。よって、内在と超越の区別は、われわれの能動性に基づきづけられるか、否かに依存し、その効力の限界づけにより、経験の全体野の中にこの区別が生じるのである。

ところで、われわれは、物とその超越性に関するこのメルロ＝ポンティの初期の見解に批判を加えることができるだろう。物の超越性は、それが射影し、汲み尽くしがたいという性質によっていることは繰り返し述べた。しかし、物はある種の本質、すなわち、どのように局面が変化しようと変わることのない性質を核として有していなければならず、そうでなければ、やはり現象の連鎖である物は、走馬灯のようにまとまりのないものになってしまふだろう。物は正にその本質によって、その当の物たりえるのである。『知覚の現象学』において彼は、物を物たらしめているものをスタイルの統一性に求めたのだが、彼がそれを物の超越性、あるいは客体性を保証するものとは捉えていなかったことはこれまで述べてきた通りである。では、物は本質的には超越的ではないのだろうか。物は、われわれがどう見ようと、どう視点を変えようとも不變の本質を持っているからこそ、われわれ主観から独立しているのだという感じを与えるのではないだろうか。もちろんメルロ＝ポンティ自身、この初期の見解の難点に気が付いていた。実際、彼の晩年の仕事、『見えるものと見えないもの』における物の超越性の把握の仕方は、初期とは全く異なるものになるのである。

### 3. 『見えるものと見えないもの』における物と超越性

メルロ＝ポンティは、1961年の5月3日に急逝した。彼が当時準備し、次の大著の一部にするはずだった一応書き上げられた草稿と研究の断片的なノートの一部が、クロード・ルフォールによって編集され、『見えるもの

と見えないもの』<sup>(19)</sup>と題されて出版されたことは有名である。本来ならば、この著作を研究する際には、この「草稿 (manuscrit)」と「研究ノート (notes de travail)」とは区別、整理されてしかるべきであろうが、本論文では、それらを一つの最晩年の思想を形成するものとして、特に区別なく取り扱い、物の超越性の問題をめぐって関連のある部分について言及して行くこととする。

物と超越性について語っている箇所は、「草稿」には余り見当たらず、むしろ「研究ノート」の中に非常に多い。先に述べたように、このノートは極めて断片的であるのだが、主張していることは一貫している。この節では、主にこれら断片的なノートを取りまとめ、超越性に関する彼の主張の再構成を試みて行くこととする。このことで、晩年の彼の思想が、前節で考察した初期の思想とはかなり異なることを明らかにできるだろう。

『見えるものと見えないもの』には、1959年の1月から1961年の3月に至るまでの断片的なノートが納められているが、超越性という概念は、そのほぼ全体にわたって見出だせる重要な概念である。例えば、「物の超越性と幻想の超越性」という断片では、物の超越性は、物は汲み尽くしがたいからこそ充全であるということを言わしめる。つまりそれは、視線の下ですべてが顕現する (*étant toute actuelle*) ことはないということである。一しかし、この全面的な現実性 (*actualité*) を物が約束するのは、それがそこにある (*elle est là*) <sup>(20)</sup>からである」と述べている。われわれの探索に応じて、新たな射影や局面が現れてきたとしても、それを、同一物の局面や射影として引き止める何かが先立って与えられていなければ、物は自らを物として取りまとめることができないであろう。「汲み尽くしがたい」ということが、正に、物の局面の汲み尽くしがたさとなるためには、そこに新たな射影が沈殿し、結晶化する核、あるいは物の枠組みとなるようなものが、射影する充全たる物に先立って存在している必要があるのである。

また別の箇所で、彼はこう書いている。「知覚されたものに特徴的なもの、それは、既にそこにある (*être déjà*) ということであり、知覚行為によって存在するのではなく、この行為の根拠であって、その逆ではない。可感性=超越性、あるいは超越性の鏡。<sup>(21)</sup>」この一文は前の引用と呼応しているだろう。つまり、メルロ＝ポンティによれば、われわれの知覚世界には、最初から射影を伴った充全たる物が存在しているのではなく、物と呼べるほど堅固ではないが、そこに、検索という知覚行為が呼び込まれ、新たなほかの現象がその局面として結集してくるような何かが、物に先立って存在していなければならないのである。上の引用で見たように、彼は、この結晶核のようなもの、すなわち、物の枠組みを与える「可感性」を超越性と呼んでいるのであって、ここにおいて超越性は、何かが存在しているということをわれわれに知らせるものと解釈されているのである。

だが、この何物かの存在を知らしめる可感性とはどのようなものであろうか。彼は、「プレグナス、超越」という断片においてこう述べている。「この観念 プレグナス、ゲシュタルト、現象) は、純粹な『…がある (il y a)』としての存在との接触をあらわしている、ということを示すこと。人はこの出来事に立ち合い、その出来事によって何物かが存在するのだ」<sup>(22)</sup>このように、彼は、超越の根拠となる「…がある」という経験を、ゲシュタルトやプレグナスに基づくものと考えており、当然、上記の可感性とは、ゲシュタルト、あるいは、それを支配している法則であるプレグナスに他ならないのである。では、ゲシュタルトやプレグナスとはどのようなものであり、またどのように超越性と関係づけられているだろうか。

ゲシュタルトの特徴について、彼がまず主張していることは、それが時空間的に特定された個物ではないということである。ゲシュタルトは、要素に分割しえない、その総和以上のまとまりや構造を指し、全体として安定し、単純で秩序あるよい形態、よい布置に自らまとまろうとする傾向

(プレグナンス) に支配されている。よって、ゲシュタルトがある種の構造や布置を意味する限り、ある特定の時空間のある個物のみに適応されるものではなく、また、個物の所有している特殊な一性質とも言えないであろう。むしろ、それは一般性を持っているのであり、空間一時間飛び越える布置に自らを統合すべく身構えているものなのである。つまり、ゲシュタルトとは配分の原理であり、等価系の軸である。と言っても、それは空間や時間に関してまったく自由なわけではなく、やはり、時空間のある範囲、ある領域を支配し、君臨しているのである。そこでメルロ＝ポンティは、こう主張する。「それ〔ゲシュタルト〕は超越性である。それは、人がこれまでその一般性、その移調性について語りながら表現しているものである。……したがって、ゲシュタルトは知覚する身体と可感的世界、すなわち、超越的な、地平としての、垂直的な、非一遠近法的な (non-perspectif) 世界との関係を含んでいるのである。<sup>(23)</sup>」

この引用で明らかなように、ゲシュタルトは超越性と見なされ、さらに地平、垂直性、非遠近法的な世界に結びつけられている。これらのものは、正に、その局面を変化させず、射影しないことがその特徴である。また他の箇所でも、「非射影的で、垂直的な世界という意味での知覚されるものは、常に、感じるということによって、現象的なものによって、沈黙した超越性によって、与えられるからである」と書かれている。これらのことから、『見えるものと見えないもの』における超越性とは、非一射影的で固定的なものを指しているのであり、『知覚の現象学』に見られる初期の見解（そこでは、射影する汲み尽くし難さに超越性の根拠が求められた）とは正反対であることが分かるだろう。

このように、ゲシュタルトやプレグナンスは個物ではなく、個物に先立つて、われわれに「そこにある」、「既にある」という経験を与えるものなのであるが、それらは単に無規定な存在を知らしめるだけのものではないだろう。ゲシュタルトは、ある種の構造や布置、骨組みなのであり、つま

り、何ごとかを語っているわけである。よって、ゲシュタルトによって何かの存在が与えられるときには、単に「…がある」という存在の経験だけでなく、「他のものではなく、これがある」という、その存在の性質や本質についての経験も同時に与えられるのである。メルロ＝ポンティは、ゲシュタルト化とは、「動詞的本質 (Wesen verbal)」であり、現成する作用、〔世界の〕光線による何物か (Etwas) の出現<sup>(25)</sup>であると主張する。ここでいう「動詞的本質」とは、存在と対立するような古典的な意味での本質ではなく、「あるのか、ないのか」という存在についての問い合わせにも、「何であるか」という本質規定についての問い合わせにも答えるような、最初の存在の表現なのである。つまり、ゲシュタルトは、「…がある」経験と「…である」経験を同時に与える、われわれと存在との最初の出会いであり、それ以後、このゲシュタルトが、次元や軸となって、物が成立するのである。

ところで、ゲシュタルトあるいはプレグナントは、古典的意味での単なる本質ではなく、「動詞的」と形容されているのであるから、実定的、固定的、静態的に存在すると考えてはならないだろう。メルロ＝ポンティは、プレグナントが動詞的な本質であることを、それが「奥行き」としての性格を持つと表現することで主張している。「それ〔プレグナント〕は、現成するがゆえに本質なのであり、自己制御性、自己から自己への凝集、奥行きにおける同一性（動的同一性）、離れて存在するものとしての超越、『…がある』である。」<sup>(26)</sup>なるほど、プレグナントが本質であり、超越であるかぎり、それがわれわれから離れて在り、奥行きにおける同一性であると主張することは直観的に理解できる。しかし、その奥行きにおける同一性が、なぜ「動的同一性」なのだろうか。

メルロ＝ポンティによれば、奥行きとは、手前からむこうに向かう幅や、対象への単なる距離のことではない。奥行きが生じるためには、ある固定点と、そこを中心とする事物の一連の移動が必要なのであり、たとえ

ば、ある固定点が存在し、その手前の事物が一方向に移動し、その背後の事物がそれとは逆の方向に移動する必要があるのである。固定点の固定性とその前後の事物の移動性は、相互に分離可能な部分的現象の一群ではなく、むしろ、それらは系列的な「ずれ」であると言わねばなるまい。奥行きの感覚は、この「ずれ」によって生じるのである。そこで彼はこう言う。「近接物と遠隔物、地平を持った視覚野の構造は、超越性<sup>(27)</sup>が存在するためには不可欠であり、すべての超越性のモデルなのである。」超越性とは、奥行き知覚における固定点や地平のような、不動のものに他ならないのだが、彼がここで強調しているのは、その出現は、視覚野全体の移動、系列的なずれを前提としている、と言うことである。つまり、超越性は、単独に孤立して存在しているのではなく、動的な全体の特異点に過ぎないのである。結論づければ、超越としてのプレグナントとは、移動や運動のただ中の、しかしそれと切り離せないような固定点、すなわち「動的同一性」なのである。

以上見てきたように、プレグナントが本質であり、ある種の不变性や固定性を有していると言っても、それは知覚野の孤立した一現象ではなく、あくまでその運動する知覚野の全体構造に基づいていっているのである。よって、プレグナントは、積極的・実定的・静態的な固定性ではなく、むしろ、全面的に動的な世界において、周囲からの弁別・対比・対立によって切り取られてくる固定性であると言える。プレグナントについて言えることは、当然、ゲシュタルトや本質についても適用できるだろう。

後期のメルロ＝ポンティは、ピアジェの発達心理学に強い興味を示している。ピアジェは、彼の知覚研究において、ケーラーの理論に触れながら、「よい形態とは、すべてが変形であるような知覚構造の唯中で、最大の補償、したがって最小の変形の原因となる形態のことである」とゲシュタルトを自分の理論によって再解釈している。メルロ＝ポンティはこの解釈を参考しながら、「それら〔幾何学的形態のプレグナント〕は、存在を

## メルロ＝ポンティにおける物の超越性

固定する。それは、ピアジェが、まずい表現ではあるが、『変形』はそこにおいて自己相殺すると言いながら、主張していることなのだ」と記し、<sup>(29)</sup> 批判的ながらもピアジェの解釈に同意している。このピアジェの解釈は、上記のプレグナンスについての見解と一致しているだろう。

また、彼は「草稿」やその「補遺」のなかでも、本質について同様の主張をしている。「それ〔本質〕は、したがって、実定的な存在ではない。それは、不一変項なのである。正確に言えば、その変化あるいは不在は、物を変形するか、または破壊する。そして、本質の固定性、本質性は、われわれの持っている物を変形する能力によって、正確に測られるのである。諸事実によって汚濁されたり、曇らせたりしない純粹な本質は、全面的変形の試みからのみ帰結しえるのである」。<sup>(30)</sup> 「補遺」においても、彼は、物の本質やその同一性を、変形の過程のなかで捕らえようとしている。それによれば、物には、たとえば小石や貝には、これ以上変形してしまえば、もはや小石や貝殻とは呼べなくなるような限界点が存在し、ある核となるような特性が保持されているときにのみ、それはその物たりえるのである。確かに、貝殻を粉々に碎いてしまうなら、それはただの砂となってしまうだろう。したがって、「物、小石、貝殻は、すべてに逆らって存在できるような力はない、と言わねばならない。それらは好条件が集まったときのみ、その含意を展開できるような柔らかい力に過ぎないのである。」<sup>(31)</sup> これらの記述のなかで共通して主張されているのは、変形との関係における本質であり、動的な過程において、周囲の変形と区別される形で初めて生じてくるような固定性と同一性なのである。

これまでの考察を結論づければ、『見えるものと見えないもの』においてメルロ＝ポンティは以下のようない主張を行っている。すなわち、超越性の根拠は、ゲシュタルト、プレグナンス、本質と言った、物において射影しないもの、固定的なもの、不变なものにあるのであり、それらは、知覚世界のうちに射影する充全たる物が出現してくる以前に、「何物か」が存

在するという経験、言い換えれば、存在との最初の出会いをわれわれに与え、以後、物が形成される際の次元や軸として働く、ということである。しかし、注意すべきことは、ゲシュタルトやプレグナンス、本質が不变的であると言ったところで、それらは実定的、静態的、実体的な本質として存在するわけではなく、全面的に運動変化する世界において、それらが、その取り巻くものとの弁別的・示差的・対立的な対比によってのみ、不变項として現れる動詞的本質であると言うことである。

よって、赤色は、見られることによってのみ看取されるような本質を持つ、と言えるのだが、それは、赤色が、他の色とのコントラストや照明の下で分節化してくるといった動的な本質を意味しているのであり、その意味で、赤のような単純な感覚的質さえ、一つの構造においてのみ実現されるのである。また、「どの線も、何の点も、領野に広がっている。<移行><sup>(32)</sup> の運動と指向的浸食から、分化と客觀化によって生じるのだ。」

これらのことばは以下の言葉が良く表現しているだろう。「本質 (essence)、動詞的本質 (Wesen)、本質と知覚の深い類縁関係。本質はそれ自身、骨組みであり、感覚的世界の上にあるのではなく、下にある。あるいは、その奥行き、その厚みのうちにある。<sup>(33)</sup> 最終的に、晩年のメルロ＝ポンティにおける超越性を一言にまとめれば、「超越性、それは差異における同一性である」となるだろう。

#### 4. 考 察 と 結 論

以上、われわれはメルロ＝ポンティの物と超越性に関する見解を、初期の立場と後期の立場に分けて考察してきた。『知覚の現象学』に代表される初期の立場では、超越性は、物の開かれた性質、つまり、物の局面が次々に射影し、汲み尽くしがたく、その連鎖が時間的で未完結であると言うことを意味していた。ところが、晩年の『見えるものと見えないもの』で

## メルロ＝ポンティにおける物の超越性

は、超越性という概念は、物がそれによって成立するような本質、そのようなものとしてのゲシュタルトやプレグナンスであり、運動や移行における同一性、非一射影的なもの、不变項として捉えられていた。

では、この正反対とも言える彼の立場の違いを、どのように解釈したら良いだろうか。

初期の思想において、物の汲み尽くし難さが語られるときに問題となっているは、物の周囲を巡り、射影してくるものを物の局面として取り込んで行く探索的知覚行為の限界である。物は次々に新たな局面を見せ、物の諸局面がわれわれの前に全面的に現実化することはない。このように、展望する世界が時間的に未完結である以上、物や世界の総合を目指す知覚的探索は必然的に挫折するはずである。よって、初期の思想で言う超越性は、われわれの知覚が逃げ水を追うような類いの行為であることの表れであると言えよう。

しかし、世界が時間的である限り原理的にありえないであろうが、もしも、射影が完結してしまい、われわれが物の全ての局面を把握しきくことができるならば、その時点で、物の超越性は消失してしまうのだろうか。それは考えにくいくことである。確かに、その物は透明で明瞭な知覚対象となるだろうが、それだからといって、それが客体であることをやめるわけではない。物は、その自由な変形、さらにその消滅さえもわれわれの恣意に完全に委ねられないかぎり、超越であり続けるであろう。このことは、超越性が探索的知覚的活動のみの限界点として現れるのではなく、あくまでわれわれの能力一般の限界に現れるものであることを示している。前に述べたように、イメージが内在的であるのは、われわれがその内容全てを知っているからではなく、われわれがその全ての可能性、その形成、その変形、その消滅を自由にできるからに他ならない。よって、超越性を知覚行為との関連のみで語った彼の初期の立場は、不徹底であると言わざるを得ないだろう。それは、初期の知覚の哲学が、超越性の問題を認識の枠内に

閉じ込める傾向があり、われわれと世界とのより一般的で力動的な関係において捉える広がりに欠いていたからである。

では、知覚行為も含めた、われわれの能力一般に対立するところの超越性とは何であらうか。もし、われわれの能力が絶大なものであり、あらゆる対象を自由に変形できたとしても、その存在をわれわれが作り出したというのではない限り、いかに変形されようともその物はわれわれに超越的であり続けるだろう。これは、メルロ＝ポンティが、物の存在は「<sup>(35)</sup>非人為的自然の基底に根を張っている」と言い表したところのものである。われわれの能力は常に、それが向かうべき何物かの存在、すなわち、われわれの能動性を受け止める存在を前提として始めて成立する。たとえば、知覚的な行為に関しても、主観の構成力が作動する次元をどんなに根底まで掘下げていこうと、それが能動的であり何物かに向かうものであるかぎり、その行為の根拠となる何物かが既に存在していることが必要とされるのである。とするならば、すべての行為の限界に立つ超越とは、最終的に、「何かが既に存在している」ということ、すなわち存在が行為に先立って与えられているということに行き着くはずである。

メルロ＝ポンティは晩年の思想において、超越性を「…がある」、「既にある」という可感性に結び付けて、それが「知覚行為によって存在するのではなく、その行為の根拠である」とした。<sup>(36)</sup> その可感性とは、ゲシュタルト、プレグナンスによって生じ、それらは、「…がある」と「…である」を同時に与えるような現成する作用であり、動詞的な本質であった。こういった主張のなかで彼が暗示していることは、「何かがある」という経験、すなわち超越性は、確かに知覚のなかで与えられるとは言え、知覚行為の能動性に基づいているのではないということである。世界とわれわれとの出会いは、活動的な知覚、探索的で意識的な知覚行為によって始まるのではない。そうした主観の能動性が発揮される以前に、主観の一方的な働きかけによるとも言えず、また客観の作用によるとも言えないような現成の

作用によって、世界とわれわれは既に関係付けられているのである。ゲシュタルトが生得的だと言われるのは、それが意識的・能動的に成立しているものではなく、それに先立って世界とわれわれのア・プリオリな「蝶つがい」<sup>(37)</sup>の役割を果たし、言わば「根源的設定 (Urstifung)<sup>(38)</sup>」だからである。従って、晩年の思想における超越性とは、実は、われわれの能動性がある基盤の上にしか成り立たないという主観の能動性の内的限界を言い表しているのであり、こうした意味での超越性は、彼の初期の思想のようにわれわれの能動性の彼方に現れるものではなく、その根底に現れるのである。

ところで、晩年のメルロ＝ポンティによれば、超越性は動的世界における不变項であり、固定的なものであったが、このことは、超越性が行為の基盤であることと密接に関わっているのである。つまり、世界が走馬灯のように変転するならば、われわれはそれに対し為す術を知らないのであり、われわれの行為や能動性が発動するには、その対象がある程度安定している必要がある。超越性が動的世界の不变項であることは、それが、能動的行為を描き出すための安定した基盤を供給しているということに他ならないのであって、身体と世界との間に「均衡」を与えていることを意味しているのである。

以上の考察を経て、本論は以下のように結論づけられる。メルロ＝ポンティは、その初期においては、超越性を能動的な知覚に対立するものとして考えていたが、晩年にいたり、それをより広い枠組みで捉え直すことになる。すなわち、彼は、知覚の根底を探求するうちに、知覚行為を含めて、あらゆる能動的行為がその上に成り立つような、世界とわれわれとの「根源的設定」としての超越性を見出だしたのである。晩年の彼にとって知覚は、対象をめぐっての探索を意味しないし、また認識のうちに閉じ込められたりしていない。彼は、知覚の根底に、われわれの能動性一般が基礎付けられる存在との最初の出会いを見出だしたのである。したがって、

晩年の彼の思想は、「存在論」として特徴づけられることが多いが、それは何か神秘的な思想としてではなく、われわれと世界の動的な関わりを描き出すための基礎論として受けとらえなければならないのである。

## 注

- (1) *La structure du comportement*, Paris : P. U. F., 1942. (以下 SC と略記)
- (2) Köhler, Wolfgang 『類人猿の知恵試験』宮孝一訳 岩波書店 1962
- (3) SC, p. 127.
- (4) Ibid., p. 130.
- (5) *Phénoménologie de la perception*, Paris : Gallimard, 1945. (以下 PP と略記)
- (6) PP, p. 141.
- (7) 『知覚の現象学』2 竹内, 木田, 宮本訳 みすず書房 1974. p. 参考
- (8) PP, p. 348.
- (9) Ibid., p. 362.
- (10) Ibid., p. 368.
- (11) Cf. 10)
- (12) PP, p. 216.
- (13) Ibid., p. 370.
- (14) Ibid., p. 372.
- (15) Ibid., p. 374.
- (16) Ibid., p. 376.
- (17) Langer, M. Monika, *Merleau-Ponty's Phenomenology of perception*, Macmillan press, 1989, p. 96.
- (18) Cf. De Waelhens, A., *Une philosophie de l'ambiguité*, Louvain : Nauwelaerts, réimpression 1978.
- (19) *Le visible et l'invisible*, Paris : Gaillimard, 1964. (以下 VI と略記)
- (20) VI, p. 245.
- (21) Ibid., p. 272.
- (22) Ibid., p. 259.
- (23) Ibid., p. 258f.
- (24) Ibid., p. 266.
- (25) Ibid., p. 260.

メルロ＝ポンティにおける物の超越性

- (26) Ibid., p. 262. cf. p. 273.
- (27) Ibid., p. 284.
- (28) Piaget, J. *La perception*, Paris : P. U. F., 1955, p. 19.
- (29) VI, p. 266.
- (30) Ibid., p. 149.
- (31) Ibid., p. 214.
- (32) Ibid., p. 284.
- (33) Ibid., p. 273.
- (34) Ibid., p. 279.
- (35) Cf. 15)
- (36) Cf. 21)
- (37) VI, p. 289.
- (38) Ibid., p. 262.